故情返英解

へ13
2132
84

△山津伊

自序

倡家氏曾古しらる情郎を恰
韓胴が契乃如し天小翔比翼の
鳥ハ二人が中れ宮殿臥坐よ名あり地
生ル連理の枝ハ植込繁き中庭に
めづけこの戀中の樹を薄くちるこ

84
13特
2132
84
藤原文庫
藤原文庫
藤原文庫
34

だてみて水にさせる櫛丁食をさせ
んとて氣に揉番新なれば亦苦利切
る番頭の迎ひも木乃伊取の木乃伊
とるとく細腰よ著せんとて計まぐ
左右いねて浦に三十二孔の穴
廊下の費しいとて悟し夢遊とも夢

彼宋人の樵鹿乃梦も妓の情と出侯
が夢もうんせるも番皆夢中の夢
ふんと前立して又夢題と出こと
出ること

戌の
春

梅暮里谷峨述

春信画

目録

○第一回　我身代うりて金とおこす
○第二回　精疑とのうて夢中堂ふ
○第三回　倡妓のうれん雑檀とやぶる
○第四回　赤心とつうて怨恨とうける

終

後行
後篇妓情返夢解　梅暮里谷峩著

○第一回

人のこゝろと色廓のうるひもゆりゝれ散りも
花咲も花中よ実ゝとり病ふれうんぬとひも
うるゝゝの勢でれうる源のゝうゝべのうんれ
ゐんうゝねぎつうもゐ世の義理も以稀よ
うる者花のうゝうゝまつうる腐源妻ふ清
さんへモゝゝおれうんゝゝかもそれおれひる

でざんそうれんさま〳〵おいでなされ〳〵すぐ〳〵わたし
くれやうにくろうのそんぬりのいざんせん（ゆうをゑひいで
ちやり〳〵さのて）いるこころ〳〵びやくぶの
おくうなぎびてこそて　氣東　うやまつてこころふも所を天さまなぐ為て面
ぬぐしてもこの二階へせうでんれぐこやるそうぐ
といへどもこれも
あるこころ〳〵ト云ふて
ゆるを　妻　十二　れさまひ
せん　氣　おうふくぐれ
ひろ口ふ手にするもうそうまいすのぐのゆさ中へ
むろう
這入うのうさぐれさぐるやうさ（ト云ふてアぐんからんぐ
いる）

ぐでれさんこ八さんもいうぐんかぐ上ぐせ〳〵
おめへさんもうるいくせぐれ（ふるき）（つうう）通為でいこやそぜ
妻　イエ　りんさうひ（ね）ておいでうんを　氣　そ
まこれ（ぬ）ぬ（ひ）ひうでそ（ね）ちやうすん（げ）解せあ法師ぐ
ようふか奴（ぬか）のまうまいうでそむ〳〵ぬうそうちぐの
うまぐ〳〵うつてうさきーようつれやせあうこ今と
ようふうぐくさとひうぐうぐちそうふりうちうとぐ
ひトのゆ（く）ぐうれ（さん）うう法（ほう）てへ（ぬ）ぐ（ぬ）へひうでうの

ぜとものごいどのものでもうちうも法せてへごつぐ
へおもんをまうこい敬そこ（りん）でもひろうかト（俗ゝ言のこゝせんをこれども逆ゝ言ゝ）
ゆんぶたをゆぐやすゝぐんたらでひやうしまカチゝとえん
まいやをうら艶（あでや）ひゝや吐逆（へど）こうとうひてえ（あう）ぶ
ぐそれでもふをうちうえ 圖 そんゑむぐぐ形でん
ぐんやんちうとふをこうぐ乳もうつくぶゝんうん
しか 乳（アイトもぐ）（えんぐて）ゑんでもおめんの乳をのうふをそ
ワうちぐ乳ぐあうちやァ郭（くるわ）ふうつくゝうれやせ

んいうをめこれうちぐ乳これえんの乳こいれえ
いぐふぐうねをしさゝハさんかいやふうつてんぐ女
ぐかをゝゑうこう抑（おさ）ゝかうう 圖 さのゝふうこおえ
さんまでぐそんを乳ぐものと 乳 そふゑゆゝうまされて
いいちぐんちやゑゝの爺（じゞい）分（ぶん）婆（ばゝあ）分（ぶん）でぐこふきゝやせ
うゆをあゝうゑうてぐさ（ゝ）ぐやうんぐ手細（ゝさい）でゑゝんきう酒
りゝやとをうれべつンサアこれゝゝんゝんのまぐどそり（ところひと）（まんぐ）
圖 イ、エ ゆゝしひをうえ 乳（ナゼ） 圖 いうとゝゝうがゑゑえ

さんさにいやさまれさうにて
ぜんきさうだろう氣ぜりふ
しがあやまりましさろう
に酒義てんれんぜろ
ぜんぜるていくんろ
ぜんぜんの園かるのるでもぜんぜ
ふ門かろ水合もりくすう
るかどこれでんむぜも
ところのやうにちげくもお
よんぜんぜんぜんぜんぜ
きいをめんぜいくしても人
まだまアそのこんをそこ
きあくあとおいうんとか
さんもこんくあわぜうんを
をこれを涙ぜうにぜとを
てをおめんさんの世話よあ

とこんろ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ
ぜんぜ

にはりをひとうんかをとらいらつてもまをだんゆにおいぐ
ゐんをとを氣がよくぶてさんをけれどもををさんをとられも
をるをとのぶか氣をあるいをかどぶのがぶごろをみて
下月ふるぶんるやうにおいでゐんをもゆものをあざや
をるぶをもせどじんをやうにおんしのをまいををくらぶ
んのうらんどめやうでゐるうをさんをつておくゐんし

氣

をうちもらんゐををうんをてもまををんをれ西をんを
ゐせうちしておるををあをもしをくもわんむぶばいゐ

むをうをかるる八さんの月のうん坪りひまををいむひのら
つをんかゐつくむぶ西でをもれんかゐんをさる月を陣
ぐらふゐるををうをんおまをまでぶをのりれををををう
陣のをんまもあるうんをやをてをんおんをれ氣をひをを
てををむををらをんむぶをし寅のわんりのくをけをん
ぶをくんかをさんか

畫

をれをもおんふををうをいるつておくん
りんををうをれをうをさんをおんをんをのやをいるつて
おくんりんをふをを りんゆもをををすををうを麻て氷

おいてかんを[氣]おめんも表うゑんぶつはおそしがせんしたの
[書]いろいろよおそしゆゑいもとなれどもおれすんせんせんあん
滴りおそしいもとめらめんたるとこらあんをまかひと
ころつのそおおすんをとれぐとへめつされ寝すんし
ところもありひせんれ今はやうれ白まし　おひぐかんせ
やうれすつてかうお出すんを毎夜寝てをるおひぐ
なんまんつとしふあんまよがつきてのこしうともろひ
をすれはまくはきよすりとうとかゆしうざんをそして

書きつけがあへおせうすんせんせんめへかうおそくさんとめうらよみく
いろいろしかんしと藝者(げいしゃ)の所が何らあるとうきそろもやアさうかに
きてひしらかういろいろしまあすいをとれどもモうきれさうとぞ
くりかへしひらんすさくくきしいうあんうじかんをまづ申しきき
終うかんそのあかんのとりやところでわれへそうでざんそのあと
未まは済さうらゝ来なりしとせうまうひきろうみうえられ
あめんかく氣がもでんざんせん[氣]すんかくるのきうくへるの
と出精(こけ)が十九丈とせへいきやア志めへしくそん無不自由(どじゆう)

こふなるまのなかに八ふ糸さんもしざいてゐぜんに女ればな
せんやし寐るめん肉が立川くでよかつぜん金をこさぐぐそうぐ
しら西へきとく寐るとれおめんさんもよし川がいとゝたふ人むすれ
がまつてゐやんサアくコレサ日よ親が明のコツチコツチソウ難がかく傍
づまの男もそふ寐むつさがりてゐあひそつうしだ[三糸]うろち
やつく女のく女あげなんしかまぶぐ寐まおわるでか
んしれるの状[氣]ソウく[八ふ糸]アくかう浦しひちんうとむ
よしさ寐るとかくだ[氣]ニヤウとされらくいねさらいトウかで始へ

しなうこれらゐあそのだんのぶんと静まろうおりんで
ぜん女んぜいうげんにせうともやゝめるものさ[八]トロトロ
よふれ女りのさがすがい是をとゝよ[氣]ヤアどんかゆるぐん
[八]そふぜんなぐひる身ごさりつまんごとしろがアノ女のがりう
のきくしややひやん香が屋く糸がちえりれつる琴がしとろへきておれを
じやま邪魔ふしてあんのそねといてそてなかろう川けがうふ
くつぎ実出されるかれまつとく氣状ともむとあるされ
と是と以ふかれらとひもつうねるとあるものなぐ[九]是

のようごとやアれ〳〵ゝ様久〳〵いりのきもうえあげも変
うれうれ 書 ふ糸さんと申やう〳〵おめ人さんの仏せうとおも
あんしれ人でらざんせんせん久人 八 そうサひとうさわ〳〵す
せ結ともあるこんいの中れりのご 書 それじゃうとく
しがおうみさんのようとゞやうぢう美ふるもむりでも
ざんせんれ 八 おい〳〵ぐるも今あるうすじゃアふーちろ
とれんがいうもぐる 書 そんあたらくさぢも四状あん
八 ナレノだらういわれがかうて氣じゃアある久〳〵四状ら

もいうそのでこれつあてんぜひまふされんうちゃアあるもの
ある 書 ひうこうのうちをまうれてくれうといふてこでさんをえ
八 うう〳〵まわれうぜうアうあうてさゝやけせんどもいふをうて
久のうう〳〵うえれ人ゝうらうはけのたうう女こぶおゝみいさんあふて
ぢひ氣のやりもおをこれんが 書 おめ人さんの欲貝でうえ
元 いうホをきあるこりさ 八 そうやアうふうまうれ人がて
久乃これ久人の女房ふたもまうゝふんうぶ代男も知て
るがお家が家が大おくもものでゆ久さゆ久おゝふかう

まつていてゑりうしへのきこへもつてくるいうつゆゑんさせてくまげ
をお持てしまんうに【書】よふくじんちやうにされまんしくね【八】抱を
てやアされぬへけアやアおうしれぬへ翁がおうかしきれぬへで
ごふきうものご【書】マアまんとおひおんしよ入【八】お前ふつよま
やアておへのんからおお前もうるいうすもおふれがあれそれつきる
をげいぬへが腹をきんくたしぬへがつれとろとようきいて
くてやておへもきんつろとやうられまでどんじお袋のきつ
よがそでぬへておへも女房ましつゑろうしまでいつや

そくれをさうお袋のおゆうちん倫盈ふとくきんさも
あのへしとらんきく連て逃られもしれへまさおん
とんをいつくまれいおうつくろの良縁さうとしざよも
せきもしてやろうといふそがおんを恥つりしてまれるら
おあつるき縁を切る二つより外ふぬへ万一お袋ともうお
乞うくしいうつとろうとうろかきにけべやしまん親とのて朽
さしく思ひふつられい今人よまうさ連ろう露を涌きを
せてうい寺一てぬへ乃ふ世うるかうるしそれをきつつ

まゝ　むるおれいふ義の中れ不義のつゝとれもあれい
とゝねどゝいつゝふ者か者を内へ引いれてんおさ海へを
世界もを角ねゝとれば寺四のまげぬてゝゝちんつゝて
きれて者四人ゞ心ゞやゝとゝいお袋をうゝゝゆゞらむやう
かゝのゝそれゝつゝんゝのれゝのゞゝ面をゝあてゝんろ
とゝうゝくゝまけをうゝてゝゝう分ゝゝ伝のもいゝ者よ注ゝ
ゝうゝかゝもひゝうゝにおれも安ゝ厚よまで者ゝうゝゝろゝと
おゞくゝうの悪心ゆゝきまゝ者のゝゝものを注れてゝれゞ行ん

まゝうゝ心ゝうゝんゝよゝ　素ゝうゝやゝゝうゝでゞん
ゝゝらゝうゝもゝれゝうゝゝゞゝかゝうゝいゝ者ゝ　八　お袋の程
ゝゝ屋ゆゝ行ゝもゝうゝゝもゝゝずゝうゝぴゞせゝかゝゝゝれ
て者ゝうゝゝ者よゝもゝ人のゝゝゝろゝけゞあゝうゝて来る四人
それで打言とかゝもゝくゝつゝきゞゝれゝけゞゝゝゝやゝくゝる
やゝゞあゝうゝゝゝでアノ内家ゝ安ゞゞゝうゞゞんれゝあゝゝを
ゝうゝんでゝるゝゝゝゝゞゝゝゝ仲ゝゝゝゝゞ今ゝゝ者ゝゝゝ和ゝ
例のあゝゝゞゝゝゝゝゝ成ゝつけ者ゝゝゝゝれゝゝゝ

まさかりのようひこでもゆ来れ(ゆ)ゆやアいつと気
氣 イヤモ けしのこねこねと氣のあるがふく紙もあれでかて
ものざ トモデモ ヨウザ 俳ぜん(ぜん)ようがいすぐわく(く)いうでとお
んもふもトストキヤレイちやくトもしこん(こん)やうこんできこちこアア
おわるんいぢゑやうこおもひかる 畫 ごていぬ(ぬ)いとものの
うかおこみさんこやらつぎこと(こと)ひやもとらこうでら 色
さこんさうでもいまさこどみうるかるものでざんとまうこ
おあうこんだうわまこられてわうれるのあいわれられねこ

いこうけもありいとうこうか 八 その氣(き)がこれまもあんどざ
ざいこもお袋ゆさこうこんつれてきてもむづうこといこ我まもうえ
ふぢこんてのせられえあき紙てくれてこんこらぢざれ(ら
 畫 こうこうこいこうこやアきづうこひうこんとなあんがうこうこ
れやうかだうでもさうこもかうひとあ(こ)かこうこうか書(こん
のこぢうこうりんいこたうかこ合(あ)あつてもこんとをきら
せてあつこうこうきれ(せ)んうこうこ思うこうこかこんかんこ
むうこん義(ぎ)理づぢうこ祝うこ思ひかりいとこもこんで志あ

（を 八 そうこうこうこうどもいくまおんぼりきくれいをさ
いてそれこれ乳あがいやだうろくおうかうう 書 おうーかア
ぎひやぐごううどう 乳 ひてもおれらんぐそうどきやう
ぐさうこうてんおもうりくこれらおらもいうてちん
きるべい中ようおやをこうくいそどまいらうづゆてい
ひどるハワちがやうぐくんゆきんぐれ 書 ヨウもぐ
ぢうおうくあんさモシヨあうこうおうくしまいやんでもよ
うぐんせうね 乳 ぐうくもけうこうこうぐんが向さ逆

けきやーやうぜ 書 おめくさんもうぐーあんなな 乳 うどれあ
どうこひこふんどるきやぐかうもは毎度きをうむやうさ
書 ナゼへ 乳 うぜくもう乳がつきうろていうぐくいおがむ侍
やうんとトやびをーう 書 エモふざけうんとか 乳 ふざけうこうんば
ひやうぶ 水 ほを ぬ
比屋風の画の外拡をうんるふつけふだうのこうみをざでれ
うひのがごぜくーん 書 海ようたかおうんものく 乳 そう 形
ま
男ホうこうんうーむづうー城おうらそこう乳楽さんどうて
うぐうこうんうーむづうれうれどうの乳乐くうかく

の世ふあるまじき教ゑで深山がくれ水ありけり

[言葉] そもそもどうでらざんせんかふ [氣] ト いろくもりに一ちぢん

そなりていれ〳〵ろやア元よりかくこゝ藤くまねくその

ゆうりにかまくまぶれおいきやんにまアきくふけ申ちまし

がいる向よのざんれでアノ竹ぜくさんが屏風をくろうとーうま

りしてそいるゝ豊中ざうもがつてんがやうねがひやうきん

かぶざゝるまるぎのまゝ和でも大さするであろう今しび

ゆうるりくさそてあそくそもいろくうふりのさハテそんゆゝ地ち

この桑でもかくのでゆうにそれよきうくろ丑せどゝもよ

さそうふりのざゝるひゆざゝをつぢそせてやうゝと

そうと屏風のそばいろてるゝ行ぶゆゝざるかゝいよく

がつてんがゆゝどうんざゝるうち義戸ざうむゆふわつゝ

がゝ成ゆゆくゆれだらゝいふざけあんまなゝごうぎに

ゝるかゝマア何をそいるゆざゝゝろさゝゝうちゆちてお

さゝあんゝくらうゝ藤ざゝとゝざゝちゆるれども何のゝろ

がつてんもかひゝれゝうゝ和人ゝでゆ人いゝまざアいろてゝ

新しいうらうらとて摘草とてあるのでざんとでうしい
さうしきねんとぶ毋しいそつまさうあらファかふとまそ
あるうをちうつまづのつみをぎといつてふこうぐ
がつてんがゆるねやうさようふうんぐ洗あてこうふがいつ
ちうみとるのでうちうてを摘まとおうぐ彩うでら
猪將（ぐう）ちうふうつさう 妻 だうしいかいそうれそんな
むりがういをものうく 氣（てア） まちれくそれとアふぐ
かあるうちぐう 八 かんいうく 氣 あるうどそれも

さういうんをれぐいねねいやふまの中ぐをれぐそうで
おいうんの屏風の西（京）もいうのくされ中よかくれて寐（ね）てれ
アまいをうくさ城うねば摘（ち）てくをめくねそんうちぐう
のうたいまづくさうくかいをうくらられてまぐがつて
んぐいうのあつてさうぐあんのこぐくきくもどうそうざ
うらやうづりきいうふうでアノようにあてこあてせうな
どううあつくくをどをもいうあをいおされまうくうぐ
ちやいうくそうをるうくだうくいうれもそれでもちに

いせんされもつてゝものをれうりやアもるこゝ成ものへけつて
やア性根をきゝたりいせんといふゝゝゝちがてするかどさ
うごろう始ごらんとろちぶやろ稲へいどゝぐへ八男とて
らゝて神いぢりてゝえさか氣アイサどうもあゝかあんさろで氣
がきゆれへゝゝゝりへせんさしてゝるゝ妻だらちゝゝぐんを
氣アノ行芸さんもつてゝき成ものやうろね妻アノやう
れえへてもようつぶどうゝをゝろてゝいでるんを氣名れ
件芸ゝりあんゆりめへ爆ぐろつきるやうろね妻イヤソ

毛源ゝぐんてゝゝ氣そんゝ女の子馬鹿男ゝ大名家もた
ゝぐゝゝゝゝゝその毛ゝゝゝ神ゝゝゝ
ぐゝゝゝぐへゝゝゝれいもぐゝゝゝゝ性屋ぐゝ妻アノ
だゝらゝ八ゝゝむぐ成いゝ男ぐゝゝゝゝ阪を
食ゝゝもゝれるゝ氣ゝゝんどゝゝゝんゆゝいゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝんゝ妻ぐゝゝゝゝゝゝゝゝ氣
ゝゝれへゝゝゝね八アレモいゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝ同ぐゝゝゝゝゝ妻ゝ氣ゝゝぐゝゝゝゝゝ

しさ　八　そんなにむざ〳〵泣(ない)てばかりゐるのはあんまりだが
であんせ　妻　おめへさんも氣さんじかな成(なる)ほどおいらかんをよふ
りでないしきかがくて其(その)やうによく寐てばかりおいでな
んして人に氣をもませなさんな　八　そういやア口切(くちきり)茶屋(ちゃや)
ようやうやくおめへのそばに毎晩きてゐるのにいかにも
やらが隔(へだて)てられゝば内にゐるもれは寐られぬところの床の内か
くもしも何ぞ寐ることもなく寐ても寐つかれぬ秋の夜
くあればあるほど思ひがますばかりでやるせなさ細く
ハおめへ随分(ずいぶん)考(かんが)へてゐるところが了簡(りやうけん)ハ出(で)ないのもでねへそ
縁(えん)ても祢(かみ)や仏もえ授(さづけ)るまいにおまへもしかしそれでも夜(よ)ぶかな
とくおもひきつて寐(ね)つくと秋の明(あけ)がたまでも寐(ね)ずにうき一人
のやうでも寐ぬ世事(せじ)にかまへられたらあんまりだ
あるもわる人の今の身の上(コウ)までのそばにゐてくれたらそれこそ
おれがおつにやけるも氣をもませぬ身(ツイ)ねてゐておくれ
もそれよりかなしいことがあるかそれより苦労(くらう)するからこそ腹が立(たつ)
かんにんしてくれろとうぞワシをうつてくれるなよ　妻

そうして沢を渡ひとれば
もうそんかりてくれくれ
ぐらいもとそうつうるハ世の
其つ拍ふ業よりなんしたらと
を 八 こしく 泣さやんかりんこ
かりなりつ素ゆくれゆうつ
いもんりせんどもれしたれ
マアどうもうつさきれてきっしや 妻 アイ其つすぐ

しゃと呂人べ拍がいろぺん其ていまれんぜん 八 ママア
医者でもこんやそろ 妻 アイ おいしやさんかもこをんしれが
聽 任らくくんるとおりすんを仏のをんるるでいどや
うでざんをそていろをかまつてげうでんをいりさ
うにさを南ぶおかんさんのふとりさふられるぶんを
おかんさんのふとひろうをるんひでん仏やかあ入る
ひとさすず毎度のやさすぎまんしたうん変
えぐうう二階のすのふもうふ呂人べわんよ

やうがうのくやどうくる親子のえんはあるべう
ふそひ縁ある親子どーやくらやくくやることと法よう
わらはこゝろぶんぜん 八 そこのところはおれとて
もかまくれ是ハ離いうるあどもハテまぐ海のあもも川のすの
ワくるぬみだりくしいされをくくつく法ヨがあるもあるえん
いくまん一ふあもせようとでおまれのてりくしおろまの
ゐぐさものとくるえ荒ゐすかうるぞくてくれるだようひえ
つくひめーやうくまくよ余あつてりものどゐぐくれ

海でもいく子簡もでうはさ 妻 アイくれ申まあ申さく
おくんえんし意地のうい科戸さんがまくいをえくゆ月
ふゐれば廓をりれなうひせんはぶまほさんのあうく
このやうそのえ祇是があつく父すーあをうくうん
しくんをくひせんと対かふしうけてありくさんをあふどり
てたど志ゐてゐうい岩んをれぐくれの兵衛のそ紀
んどうくくるやうれ志くぐくさあ侯もうくびんぐく
つてゐうひせん

まさかめでとうんぞ成ぬ事もあらもぐふくやし
酒のぞうぐ〳〵こがーすぐらも身を悔て
八いつてかくらぬ〳〵ぐ氣をそ〳〵ん酒よ〳〵

○第二回

氣サア〳〵さんぐこり〳〵とうけ〳〵れ八あんぐ山男八家が
ちぐつ〳〵う氣むちぐつ〳〵ちぐひもせん酒のお茶
てん〳〵ちこ〳〵八あんぐふるる〳〵酒蔵る氣うはきとうべ

かけとかう行んあ今こうこんおこ〳〵う大ぶ成ふつてきやに
八行んう氣山形よりあんのうそ成いひやちう八ひうう
そこその茶やてもつれてこうう氣茶屋もあるぬまぐ
う科戸さんうつひてきやん八ちけのうつさ〳〵いひ
あうう行〳〵あつてうむつ〳〵ひおう戸さうう〳〵久
ひ〳〵ちんさいてやうひれちつてるそうぐさうふてく〳〵せん
氣せうちく〳〵ちやつわんやう〳〵く〳〵さ
ちとといつるもうく お茶い茶やを川つれて科戸条

内よつ留こゝろさへ於人入ハ人をも人とおもふ郭気ゝ気
楽すろも今更に余所のまゝ人通返あ是はま
こゝい呉さしむらひ
お富 ね
料戸 何ゝおしりこゝゐやうもて氣のとくでござんを
十二よふさんを 富 おかんおれ抱やされおせとに合り
やさこれらつ留さんのお花衆り人 料 アイそこれ
いゑんもまめこさんてさんを 富 おみらんなもめく
おめふかくりや と 富 さすとゝらんしいせんらよへお出るか

んまくね 富 チツトハおくすしやらぬころあつて御たのみやし
さがマア寄りとのふしやしやう コレおめへハ新造さん方でも揚
ていやうれしても抱かれ 恵や バイかしこゆうますとたのむ
料 もとくとハ家人でさんもよい川てめえ夏ハせう
ねをりとおふゐすうすん 富 そんなならいうておらぐ
すせんやしおん小万おみらんみへまもしが下ゑむく
ハお咲おはやされもござんへやうが富とゝふすのでござんやす
うけあいれバ八ら恵さんがおめへのとこうへ気立ひ

きるものをつてあめんぼいとをつかうかぢばかりをどうつて
あげておくんかるそうぐわつをんれおくさぢけをう
こぢへとをとやくこんるめんこうでご在へやはぢぞふそいつぞに
お縫よくあるこつ〳〵と思ひくてくてふ〳〵まいりやくさ 妻
をうをやアをアよくんをけておおをんしさはをうくさうおいて
をんをあめんいかをををうさんのさあめんアをんでざんを
へ 三三 アイ けつこんはらあるさんのあるはへ二世も三世もかをう
なるををじといひををれをアを世ををうさ 嘉安 へ五くはらあるさん

あんおくくさんへねくをぢにうけをまりうひーをぢいつ八郎
ををうさんの西へおをんーたくをふいふをを形をうんをいを
つてあぢーがぢようふぢんーれいろをきのをてざんを祝 圖
行もをのをうれ西をびををうををこんをぢへぜんはをうさん
の西へいろいろをいくをへもおへくをれを活よはをりや
をんさんへ親をがふををうちでも神やはがあるさををもへい
ををのをへを新ををしををうをもんをんの汚来ををて地
をれがをれふをへをを事はをぢへぜんきをををうをいを

ゆかさあんはう大づくをせどごまをがーやうだいな
ら高貴のようれ人の男とそごろとせどごもかけまひ
のれ人のものをぞまーふさろがいくうんのあそばるがやくで
いすぐく人をあそぐもこ乳づつこん妻おいくうんをとこうい
やーいつくわんあそ押ひちがいやか客めく身とゆ全ど
ゆくあさ人ちがあのうちん兵ようをくくあんもも是ど
浪いとぐひの実ちくべ死のもいくれやうゆふいちく
うくちろでいざんせんどの如寿ら凡もおすくくで

さんとうんはうとうせうまんとやくでも実とつくもく
いうねといくくでもざんとめくおめくさんくくくさ
んの神ちとういくふちいかくんくんちおめくさんも
迎もわれうんを彩くわれくこのれくわとわれうんを
いわ迎うんーやうがかひれくやちりさうのわれる
をれまちさんーたくッィわれくくさ妻うんかを
きまちあちうの何のまんぐ男うちくくあちも
何も人の男にわれをちいくくでせ人を妻人

の男りきいてげんよく氣をもむ〳〵けん〳〵間さ入夢
ゑさんがわれてきたひとこれまでさもさんせん
ざきたくひ丈夫の男かたら因（引）つけておわくこ
らとしいきたくがあくおいくさんをれいわたくらむ
で私がおくまれわれくとぶんの人のやく語こんきうい
せん地りえさんも今しやうきれさんしんやうん喰ひ
しきたあんゆうみとんらきうさんを圖これん
てなくそきうきるものでごぜんをあれもあり仕も

せぬ中をさわるやうれうもうんなおやくのきぐで
でぜんをきうぶきけをつけ祝（ほうび）やアなりやせん
妻きけをつあるきらんてぞうさんをのぶん圖志
れさこきされうんのかうれをきうて わくしが連
て祝（ほう）やきと妻ヨヤこきらひこんぶおひさんを
できらきるとかくふきうひを圖おやんのやうな我
のうんくしん心の地きういものれをきうくえせ
きのに外さらふごぜんやう妻かんかおやんさん

のないをハ拾て行しくざんせんねんとそんせものに
ぐそうこん 圖 うんのかれとあるさはぐらていひ
うさう幸いごぜんぶんハぐらゑもんも〳〵ぐ仕もかくさ
れうかれうすることごぜんせんうんのもつもら
しくくんをば義理ぢふこれやうこんなきけれ
とあさ待てこそうそぶきんうちやひあん後
り出ぐらひとつすんざおれもかくこぐもいくをんに
八郎衛さんをおぐーかせんーふ 妻 うやだらーい仕

ぶおめんさんがこうらてうくくとてうのでざんを 圖 うん
ぐおろんがそうちくときろてもアノ科戸さんとやに仕
もかもきてめりやーれ 妻 さんハぐ衛さんがおおふ
んーて海くらうとおいひうんーても私ぐ母ハーもを
こくハなりひせんかのもおあえさんがおくさんといふものの
親類方とつおまけでいあるハーりくくどもの中
よりくくあるでいすぐーこのもをのれこそいこまぐり
おいくすんをくくいさんせんをんのそれがはぐうへとつよ

のんでざんす 圖 ヱモジ
くいてすく 氣 おやんぐさんあんざ
おつまらねえといふものざ
らとおもふ幕ちんとあひどろとひくていぐあ
んはりぐらしくつきひていれ神へあろ
をのめくらいふて成ちんれへ
圖 おやんもおもしろうつくそんかまめろいこでに
ごぜんせんあられ案ぐほを見ろいなる門小居

孫数でもつなぐつていやにようるれどそた
じとおもふまるくわじやをかやに白いとろ悪い
とろ沃をつあれへけりやあすりやぶん 氣 ハテとろん食
ざ元がおふくろの理屈ろあろことぐやあねへら
おめへもせうちのうへでき神とまつくいあふ
あつくおりひ出さやにむづくをいろとろ
てつまるねといふあるぐとろふ誰あるしやらまつく
まとろとろ祇じやあんはり紅あげねへゼ 圖 お

め（まで）ぐ今さ〳〵そんかこと成いつかさることこゝにわ人
知（ちな）ぬあれば（ば）あめ（ば）ぐ〳〵てんこうのひやうふされぬの
さえ（さえ）ら〳〵氣（き）成つもれば（ば）ア（ア）屏風（びやうぶ）の色（色）ハ〳〵赤さ
んをあれ（れ）ば〳〵

ト立あがりひきぶがぐ〳〵と引あけ八〳〵赤と入る

ゆりひざにてつぺと注めて

行もそうしてくんるさることふれ（れ）ばづさすんでも事（つな）

琴（こと）さんとやらをきれ（れ）ばくんるせん〳〵八コノべらぐ〳〵

うきく〳〵けのれ（れ）ばくされ（ら）圓いやく〳〵毋でこを人を（サア）

ゆけをつあ事（事）ばく〳〵されもすく〳〵さアいつをおあ人の

ふうけくうてくんかせん〳〵ぞうでいきてる円

ハあ（あ）ばくされ邪（じゃ）魔と云れ（れ）ばけるやアすやせん妻邪

同を見をれ〳〵かまふすんをぐつをさうを

つくあ乃いれをうてもをひとけりうされいさらひ

せん圓さ川もをそうるもをそうアるあ人のをれう

ちをさうるいく〳〵ハ〳〵赤さんいくく〳〵が汗を出りて

いきみもこれを承りとるひかせんし　サツさら
くせ次第もこうしといつもまれきまりせんやし
トむり女ろんよう立ちまへ次の間のふすま
とおしあけて
【氣】八さん／＼おめらん／＼【両人】そんなら夢の【氣】こう／＼
もゆめでみたんてふうしめさめくよふを残さけへ
おめへさんがされうあり夢【妻】雪ふうさればおとみさん
【八】こんふうこく【氣】三ツかさと【妻】つあらしそれの手本

へ【氣】こうしがいつでもゆめ見す【妻】八の宗系さ
んを引立て【八】ゆしくさへバ氣楽子が【氣】がてん
ゆうぞてらおこさそのも【妻】おこさるでわもはじ夢【八】
ハテわらんつてすも【三人】あるこそのどやナア
▲作者曰ばかとこ紛老とらって成るまぞ読君子孫しをねのく

○第三回

【妻】モシエ秀哉さんせひおめへさんにいてねバならね
ことわさんをがぞうもそろうくろうくまつわくるみさん

も
【秀】ハテきひをかさねてくる〳〵ぬでは惡さもか
くしてくれてハうらんで　サアくいゝく味のゝや　【妻】なる
のこぞでもさんぜんがそぞうしゝてゆるさんぞ　【秀】ハア
内氣な女ぞ　【妻】そん程しらひきろくやしいせうね　【秀】
ミサ　【妻】つまの身の上あるめんどうりしいゝすでさん
をがまそう身かもふかうひしさ　【秀】何もそうやらち
づらくもわくいうしもあるこゝごするみざおらが
やうにおびはきてでも酒だ呑でるのもあれば

まさきうふかゝものもあれ由へゑひもようすぞさう
しさでふもするもむごがあれでおざれど子とするとく
らひでん實ぞめでお前がそろう　【妻】アなそらしいされ
さうそざんもそ　【秀】そんなしん人の子をとろるそかう
れかれふこそてくれるすてりかしら　【妻】それでもそんなまくで入
さんせん　【秀】そんならどうしてさけでマアされろそ子ざ
【妻】アイおめへさんおき　【秀】今酒だりのんでゐるアノおれ
ゐ子ゝ　【妻】よろこんで　アイ　【秀】するかどこそいゝよつとめの三本

でん殿と申す母の宮のうちといやしきものに教授たち
まち人を心の屋うちまもるひまもなくらんおり寄
ゆりとも氣のうでんでんこともあらんれぬが行もき
おもぶ子とせどもようさとかりのぐ
にうきまいてつるこちんちぶうんむれいりもしが
伽ひんぶどうとさらいでやくちちちゑちろ
ちしちしん

秀 コレ きんとうんちぶうんゆく 妻 ちんゆうう

ちちちんふうてちくんうんん 氣 ちんと
ちちちねちちふいや為ちちゆのほち参う父方
しちを楽ぶく作新あんん世ちんちむりん 妻
それゆんふうこと 秀 ちんちぶうんん若ちんこんぶうん嬉
ちちねん氣ちうぶうち 妻 ちちりいいいひぶてやう
ちのうんうんちちふかちてゆ猫のぶ子のちん 秀 ちうう
りひうんでちつちちもこちひあんねのもあ作ちん空
あを伽ちもあれが子ちいちけられちられちち

に於桃つゐてぎやうしもゆうハさ 妻 何かのこけ
もござんせん 秀 とふすりのさうじを見て世話をさ
るからおんじしや 妻 それならざんをうけあふ
ひろんかてうろおかんさんにお入りけるがいいそ
このおくさんを 秀 ハテのうきつて私がいさうをれ
そのさアお内證へも手伝と一ト通りをきかせてもおろ
うかゝけ合もろくゝけお前さんすれぬこと願よれぬ
かしそくやうや 妻 くるしいてよれ 科 亭主さんか知つて

おかすんを 科 秀我さんくひさうり
てさんをね 秀 これかしるまさつゝひておく 妻 今
よひにおけへせうしなさ所 ニテ出ておくんなんし
何かのことも おきの中ひ志てらせうちやのんし
さおめえもよもぐよろこんでおくんなんし 科
そりやアようさんしさ孫 妻 程久くりしひこうく
おめへ秀 気さんにきめて世話せずておくんなん
しれ 秀 そりやア叶りしきれてもいゝくが世話を

まのくしわでそれまでのことハ志かたも孫へを
問ふしんいやみちしハこしらへ一点（ゑ）おこのあつちやァ
きのくへさせねへけりやァすまねかせつちつへ【村】そりやァ
氣はなひかんをおさしへおまへ深く（かう）おさ生かんを客人
かおつともこちがめへさんれハ文なく世話をしておよ
かんまうくのやうかん人でもけくしくあげさせいハ志
いやん【秀】おめへかそう語合（かけあひ）てハ安法ござあこれから
まこのひねりちかでき様し出かけておもしろ味の

病（やまひ）ひをつる無ようて　つまッ　ちよつとまへまかせや何も
手やうにハいかぬことハねへか無ろうへいまかせろト おとなしく よりかけ
りきのやつと出かけてやハ氣ともそあの出彫かうつそ　てるる
かんぞを志てもあるおや井桁としいふてもおのぶ志ろぐよ
しれ物を書かとけるされバ世話も志まいしこてかに
かうち浅草の中をまうくてる様へこんさへおれも
女房もおやへものでもなけ志ハ物さうかんしてる
ふるひ【妻】ニテハ家氣さんとむやうをひとれいいひな

んとおもへさんのうんの名はうんとやいとう人【高】れ
ゆあるとゞの長く筒筆所よかくもとのれへ書ケ屋泳ふ和
とゝふ男でごんとうとう人【畫】そんあゝおもへうんが
あのかゝうく屋海和うんでうんしたら【泳】行もそ
のやうふきも我つゞけこんれへやうゝあゝふまと
おもうきかでんがゝうけて出まや【料】ごろう
ぶゝうて来へうけゝこふうまれもつうねら
らぐへ荘をつけ今ようあつく同ゞうあんゝれ

ろうたれとゝへが行こもきうゝへゝくしうんとう
行くふこうんうん行もそれ行こ流ゆんゝうとそど
うきるゆめぐぐんとこうとゝいそれうう けゆけし
てううぐうゝ我うしすんゝなうゝへゝぐ和うんふん
ゆうろうこうも内他ぐゝもゆゆゝぐゝいろてふいうゝん
ゝうけうでうけくうぐうゝんできひゆんゝうる
うけも神へいまの身れゝらうのあうねうゝん義
ゆうてうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝうゝ

ワク様すんをろ男の仕合（あいそ）形くもれくてきん
をん 妻 をを者わ〳〵　ありやんをもワさうつ
ろぐさを人いやてる今ハ有つきぐををんあんま
りかふあんぐ有る添ネさんのさつ〳〵すんををろも
をろうゝうさんを 体 ありとさうきけぐまさうろ
をもそのいをゝ　をあれいをそむすゝよりしていまを
ぬさくるハのをろをさうを形をゝ　けきれば洗ぬ
形をうんけゝてふをくふんけゝやういゝさる拭をゝ

入ぢをせをぢとけをもけをねもけまを炎うぐんむをを
ホをさぐひをくいすのくマアけををさぐ苗めををこの
ありうあのさんけゝてををるをんがおをぢんも雪解の水
流よきをを絢のをらあゝをふをひとつゝをくこ
りをさ陶をを氷絢（ぐん）沈ぐんをれて紀をのぐを
をんをれても 妻 ヲく 閑 バテだを寺狐（きつね）よ鶯（うぐ）ふすゝぐを
さをゝ男のおををさと我者をををひより雪ぶれくい
な 科 マアどふをんを妻ををさん 妻 をぐををもにアイ（やゝゝと）

けーひせう

いつまでもやゆ秋をかぎりにひ二世までとる
く聞こころ指をゆやいつたのさーもぐさ
ゆうれ人の名のうへよつるるひとすゆるゆ人
のいろけつうきんうせれそのせるるさも
男のさめと公記つよまのべぶも思ぶとる
お客ぶれ実へ

科 ぶーつう魚でルふ糸さんのえいきえて志まい

ひーさうさうひとうとておとげすん〜 陪 ゆる
かどこうぶづーふずいかぶぶつくゆへうぶ
つねびつまるーこうふてゆへのすんぎーふいへ
ざるはーとつくけさよ 科 おやでさ酒とろうう
とうんとれりーじやざんせんう 陪 目ぶさ酒やー
酒のさけう酒ハうれへとそーふーいへび酒よそれ
てきつよのもけつくおーーへ 妻 子 陪 ぶかとーへ心
れ実へぶーくゆーとぶうねこーうそれまでいまさ

ば耳あの目和とうるがまくふせいしいふのの
さあいつさりしいつのまふいるをでや蔦平をよびふやう
やといや 変ろぐ アイトやく 陳 アきくさびれがちてる廉
かトそらりしいハいいいいいいく

○第四回

九丸 つねこいさんどふでもそいいよ身でん氣ぶんも
いるふざんせいいがそんるふ行をおあんじるんとこ
とふざんせん物さおいこのさまをとるいふ新よて

も稲くすでざんをおめんうれしいふ明のの久
そんるふふさぶすいもちつくいろまう氣式が椿
うんしなよ 妻 うれしいるハ蛙しいふいてもこうれしい
小百倍ぶまいねしのふしと扱あもあびそてハら氣
さんしあ我さんがもいるさどしいいこいふ憂ゆ色
らどせんどかいくあんしさこもあるさうあ我
さんが泳ぎくといるいふ式いいいいいいいふやう
あるもざんせうがんでしあるてふうれいこてもある

さぶろうや泳兵衛さんと志りつてうんざとか
ものひろんしらさまざまそてよ志ぢ〳〵くもあれ
れぬせうもかりうかと流のくまんざんせんさう
志ぢくおくんぢんし 九 それもせうぶり男のしらも
おめんさんもぢよさんもうつてうん屋のこゝろみき
とうまずとうつくらも志ぢんのさつりふ
人ぢいうくかきあんしざんかうるぎ糸ふものが
あつて志ぢんの氣とうくませうんで

もざんせんさん人志ぢ我さんがかりひなんせん
氣とも世間といのものがざんをうるんう
人の糸ひどかうやをひものがざんせん 十 四
おうさぢけのくざんをうんにひとうふうあきさ
いせんうう泳兵衛さんいそのうつうやぢゝもも
おいくすんせんうりうにぢ科ぢさんがふうりうんぢふ
氣さんのこと彼是いうくなりひせんかんれに
惜うざんをめんどの世うう行氣つけ人ぢ

にの摺小かりなんをするもあるめ人よとかうへば
蓋とそ[illegible]それざとわくこのゑざとあるへばむそひ
ゑのもとるがいやそんゑこそさうざんたてへあも祝
丑むへ人ば滅ざされざちいろくよ氣がくるひを 九
てうどけさくうぶ松架さんのそれのやうざとそへ
バ身よつゆされてゑのをうざんを仔事も身二ツ
よなるまでハそへんか氣をおぐしゑんせそれわ
そでん赤おへさんの氣よおるこそでざんを 十

アイリ〜
むりれ流をよ引うへて今ハ古を盆ハ糸
古ぎよ紋ふうれぶもうへ中成よの
みの世間へゑへもうをてく兵一トそぶ
いそ〜とくる新ゑるうう流ま琴ハ抱と
もいうそど流出を
九 ヲヤハ弟糸さんがお出ゑんしさ トつるこうぶ心ろひ
ゑふあれく法出を
菜や コレ〜おねんぶさ おうそうゑうさ 八 ツイ

まぎれてきてまぐれに帰る竃とられさせておい
てくるや【茶や】ハイトヽ気をとうつり【九】ナゼデざんさん【八】あしさ
ハなくく攥をやく出れへけりやァすもね今月ハ攥
親ど【九】あしさもやくらんすんしてもようざん
すうハか【八】ぜんてへとん顔ハこめへと思ってござりやんざ
うきさりれ来てくすつくちらきてく様がれんざ
ぜ【九】これもやつぱりおめへさんれなでざんさとゆ妻
ここさんそのやう于泣どきもハうく気さんれあ挨

しているち恩とおかりうなんしな【つ女】おなさんせん
うちらんたづようぜんじひ志さがとうもへしよ
而今も今迄そうさき残して泣きき手うわうひす
その中へおいてくうんしてごめ残られがる
ゑもれいしれへせうり【八】久しぶりできてあ
ころさうかありひこてるあんやくも泣顔をと
せにもけしひ顔をナゼことせそく様ねトいわれてよ
よおく【つ女】こまつて咄さとてかうようざんさそくれ

ーもアぞふしてもこてんやふかくーゃいせんくうお
めくさんもおちはひておくくんゐんー 九 ゐゆりと
いづれおいひうんをかくゝ床でゆりくさすな
んをぞうふざんを 〈ばくろう九をがさーづてくくくくさう
せくくあ八ぼくーぶありてくぞくくくくあおくくあ
くくあれどこくくくけきをくくす 八 ゐんぞるおうくなら氣よゐりさはま戸さ
ん純子とゐいくくきみ 百と アイトおちきくる 八 ぶゐもゐく
ぜ九ゐさんといくぶかもゐ泛さうくんまく泛新
とかくしてくくくくゆかゐをもけいくれぬくがあ

くくをぞで泛くくをでくくつぶれくゐんでもマア
いくぞいのゐ 百 ぬくくうざんをぞあくくゐてあぞく
ぜくう 八 そのゐくひゐくぶいくサア一ゐはいでくんな
トひくくくけ 下にのくく モウ くくくの内の酒もゐむゐくいゐゐ
ぬゐくるむゐくくくくくぞぞ
ぜる トいゐをきくくくくくぞゐもぞくくてんぶいくぬゐんでもこれゐハ
ゐくくをぞあくくゐくゐてくばくくくくくくぞ
くくひくくふゐをぞくくくくれも修ぐくくり合ナゼかれふ
もゐゐをてくれぬくあの經ゐくくゐりのこくくくぶ

ゑてさ[五]サア其事でくろう成ちにを[八]そんゐ
らいよ〳〵聽任(ちやうにん)ゐさいまろ〳〵[五]アイ式くり月がゐつ
月ゐれどかゐれかびもせ苗ひろ〳〵ゐろ〳〵ふんを九
辛さんつゐ子さんもゐぐよんゐいろ〳〵おくん
ゐんをに是非(ぜひ)ゐも泳ゐ泳ゐさんにせ信をたのゐん
しさ[八]ソノ泳ゐぶろつゐ香(くうぐ)屋のろ[五]そうゐ
さうでざんを[八]アノ考ろ屋の泳ゐ泳ゐろくとろぐ
いろりしろやゐそうやさゐ入れぞよつ百ろ〳〵ゐもゐ今まで

ろけありぐでゐんざてれんろいろ〳〵泳ゐぶく
ろろ考〳〵泳ゐがゐてそふゐれさうゐぐもこふい
ふろけて泳ゐそてろ〳〵ゐてようろても
ゐふもぐろゐろゐん村が考せろ〳〵後ぐそ
うをそぐろいて考ゐふしてゐの二階(小名)をひゐさを
ゐ〳〵ゐんゐも考〳〵ぐれろゐ〳〵ばつゐぐ〳〵さんい
四百氣引ろんでおいでゐろゐまをとよそ〳〵く
いろれでゐぐてんゐろわゐがゐひてん〳〵さそゐん

さて　つゝ　ゝ　ゝ　

びいせうせんがつまりてゝ発もきれる涙ばらーふと
のるふこゝろのあやまりでいとゝひてゝふとどぐざ
んをゞ今もついきてもうさぐりすんをそうへゝう
ふさくゝれようれきくすんして移変みゝゝゝもつ
らくなりひせうこゝろのつゝをゝうゝ涙あきんに浦色
新を訳も身二京ふんつさゝゝでおめんきんのゝく
んのゆくせうにしておめよりけひせう付ぐゝゝを
浦ゝうゝねうゝたゝうへゝかるゝびりりくゝろうく

おくんすんゝゝうへ
トうゝぐゝゝゝうゝいゝけもんありけゝお
もひてもせゝゝうゝゝなもあゝりもたれべ
八 ぐち 若御もいつまりゝきれきるまへゝのも
いやゝゝくれれるゝうゝはゝへんすぐれのゝでんゝさ
らふゝうゝせゝゝきんめゞゞしゝうゝびゝゝさへゝれゞを
すゝやゝゝもゝのゝゝゝもゝろちのんがゝゝうゝてわ
れバゝゝのゝゝれゝうゝもうへゝゝゝへゝバゝれよゝゝゝゝも

ゑく人ようゝみしあるよりやう一げよりゝぶろ
さゆくゝゝゝぬこゝもいてゝふゝゝぶ百一ゐれが
るまもせよこのざゐでひろう而ろうえくびゝ却く
もむりでもれ人ゝゝ中ゝふい法和ぶ氣をゝゝを
ゑゝねゆうすゝて対三ゝうゝてゝゝゝゝがかんどんてゝゝ人
ゝゝゝゝ

めでたんやんしてくりやくこんでまいらせ申でありてくこと
ありがたんがあるかぎりこちらいそまあてこともたつ
ふうしせめてふそれとこあしみよりりくがいぶの
てこかこしくこまりてうんてくれてふさちことうー
ゆんこしサく

ト　ゆこぐめ名ぬりひまとこひて男ゆれ
こゆこもゆこぐよくれゆぐ

夏　ミウくそんゆこくいりておくんゆんをかせりの

うさんをうりそかうもこをりれくいれこくぐさん
ゆくさつくきあるもあくれどこういかこと
よゆしちくせてあげらぐるもえそやひこれれか
ゆくふらしおそくあのりとらくみしてりふまで
くくりるゆるさとをそくふさりしてかくんゆんー
くくびるのうりりしそうんがあるあくぐいやうす
せりゆくもさんをまひあくあんいこれこりれこれ
やくくもこひゆんせうがこれくくれくせんこひ

あつさゆゑ〳〵ぜうかいくらもありすぐる秋さんや
かとけさん仔々めらうて私ともぢりかいぢゐぶ
んきりさ〳〵人ぶんとのゆゑりにうれんうんふあと
てるこうれるこゝぐできいせうかるのれこゝもこ
のこゝもふこゝろいありひせん

かゝぐのこゝもまさもりこうこぢり
ふるれらせぐふどうとゆて九きれこゝあり
こゝき城をゝ仔のうて

九

それでいらうくぬゝのこゝふうひせん
りれてふこゝの大じでぢんをこゝ青ハおりもて
うどよゝぐふでこゝうんつきいをめんぐ志ぐ
のこゝれとゆゝこゝうんゝ

八

そのぐゝいられれ
ぐ今ワこゝせんうこゝぐのこゝあいれがあるかぐこ
ぐひのふこゝああんぐるこゝうむぐゆきへゝいな
ぐゝうわぢんうう仔々のこゝ氣ぐよひこゝと丘り
こゝもあこゝふこゝあこれぬ月でれ私こゝれあん

ぎるんもひとくまくばこれんかものとひとつ
でもぐ山乃おらつくちふ行くく何まで心
づけくすてくんなせいくざるこくぶくの
んくせ 九 氣づくひとんくくる 四 あれあのやう
なこくくにおらくなんくくものどく ひざまくろぐとく 美出
アイ 泥系さんがお出なくれまくく

大尾

梅暮里谷峩著

傾城買二筋道

後篇 同廓之癖

三篇 同霄月之程

傾城買猫之巻

白狐通

契情買言告鳥　つるの御はきをくるまよりあのりろきおちり

辛　同二篇廊之櫻　剛しるまいろくもの[illegible]

酉　傾城買甲子夜話　甲子の夜ろ[illegible]

新　契情買中夢之汗　[illegible]

版　鶴岡花撰帳　[illegible]

近く出来仕いつ百市求傳[illegible]